
僕とFクラスと召喚獣

リンダッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とFクラスと召喚獣

【Zコード】

Z5227BA

【作者名】

リングダッチ

【あらすじ】

萩原信也は学年主席だったが試験時に休んでしまいFクラスになってしまった。

彼の運命はいかに？

プロローグ（前書き）

初投稿です
どうぞ

プロローグ

? 「遅刻、ギリギリとは珍しいな」

声のしたほうを向くといかにもスポーツマン然とした人が立っていた

「すいません西村先生。あとおはよーいぞこまわ」

西村「ああ、おはよー」

と、言つて一枚の紙を僕に差し出す

「何ですかこれ?」

西村「振り分け試験の結果だ」

「ありがとうございます」

西村「試験は残念だったな」

僕は少し用事があり試験に出られなかつた

「仕方が無いですよ、急な事だつたですし」

西村「そつか・・・がんばれよ」

「はい」

萩原信也・・・Fクラス

プロローグ（後書き）

ありがとうございました
良ければ感想・アドバイス等ください

主人公設定（前書き）

どうぞ

主人公設定

秋原信也
はあわら
しづや

性別 男

身長158cm 体重45kg

性格 真面目 おとなしい

容姿 秀吉より女っぽく、完全に女子に見える

趣味 読書

特技 料理

得意科目 現代社会 日本史 世界史 保健体育

苦手科目 英語

召喚獣 執事服で武器はトンファー

肩書き 観察処分者

元学年主席でAクラス候補だったが兄が倒れて看病していた。

兄と一緒に喫茶店『睦月喫茶』を経営しており料理の腕は軽く明
久を上回る

小学校の時に『水無月の神童』に並び『霜月の鬼才』と称えられた
しかし両親に捨てられてから勉強をせず、中三の夏休みに兄が倒
れるまでひたすら暴れた

一つ名は『無情の神』（無表情で殴り続けるため）

無断で振り分け試験を休んだため観察処分者に

萩原和人

性別 男

身長178cm

信也の兄。

中学の時、両親に捨てられた際に一人で信也を育てた

主人公設定（後書き）

良ければ感想・アドバイス等ください

第一話（前書き）

えいわ

第一話

「それじゃあ行つて来るよ

和人「ああ、いつてらしゃい」

ガラツ

「し、失礼 s『キヤツホ――』

いきなりの大絶叫

? 「お前まさか信也か?」

聞き覚えのある声のした方へ向くと

身長がだいたい180センチ以上あるくらい。やや細身であるが華奢な体ではない、むしろプロボクサーみたいな筋肉をしていて、髪の毛をツンツン立たせている

「もしかして雄兄？」

坂本「その呼び方はやつぱり信也か」

「うん、そうだよ」

『異端審問会を開く』S「すいません、遅れちゃいました』

坂本「早く座れ、この蛆虫野郎」

さつき来た人と雄兄がけんかしてる

僕はそいつへんに座つておいつ

でも設備は卓袱台に綿の無い座布団なんとかしないと病人が出るね

福原「では自己紹介をしましょう廊下側の人からお願ひします」

いろいろ考えていると自己紹介が始まろうとしていた

木下「木下秀吉じゃ演劇部に所属しておる。一年間よろしく頼むぞい」

ああ、あの子が木下くんか、演劇部のホープで人気なんだなあ

土屋「・・・土屋康太」

次は土屋君つていうんだ

島田「島田美波です。海外育ちで、日本語はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだつたので。趣味はー」

あ、次は女の子か

「趣味は吉井明久を殴ることです」

・・・とても危険な趣味をお持ちのようだ

おつと、次は僕か

「萩村信也です趣味は読書です。一年間よろしくお願ひします」
(ニッコリ)

作り笑いを見せ失礼の無いようになると

『ブツシャ——』

クラスの大半が鼻血の海に沈んだ

アイコンタクトで雄兄に「なぜ?」と聞くと「お前のせいだ」と
返ってきた

「一コホン。えーと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って
呼んで下さいね」

『ダアアーリィーン——』

野太い声の大合唱。皆は吉井君に向けて叫んでるつもりだらうけ
ど、

前の席に座る僕にも耳障りな声が同じくらい響く。雄兄も引いて
るじゃないか

その後も自分の名前を告げるだけの単調な作業が続きそろそろ終わりに差し掛かった頃、

不意に教室のドアが開き、息を切らせた女子生徒が現れた。

? 「あの、遅れてしまま、せん・・・」

『えつ?』

教室全体から驚いたような声が上がった。

福原「一度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

姫路「は、はいーあの、姫路瑞希とこーします。よろしくお願ひします。」

F 「はいっー質問ですー！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を擧げる。

姫路「あ、は、はい。なんですか?」

F 「なんでここにいるんですか?」

聞きよつによつては失礼な質問をする。最もこれはクラスの連中の殆どが疑問に思つはずだけど。

姫路さんの成績は高く、学年主席の霧島さんに次ぐ学年一位の成

續といわれている。

姫路「その、振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました。
・・・・・」

そんな姫路さんの言い分を聞き、クラスの中でもさういふと
い訳の声が上がる。

F「やつ言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに」

F「ああ。科学だろ?アレは難しかったな」

F「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて」

F「黙れ一人っ子」

F「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

F「今年一番の大嘘をありがと」

そんな中姫路さんは逃げるように吉井くんと雄兄の隣の席に着
くやいなや安堵の息をついている、

緊張したんだろうな

その後、近くの席では雄兄が姫路さんに吉井くんがブサイクである事を謝つたり、吉井くんが男子に興味を抱かれていたり等の会話
が聞こえてきたけど、どうしてだろうか?

「はいはい。そこの人達、静かにしてくださいね」

と担任の先生が教卓を軽く叩いて警告を発すると。

バキイツ バラバラバラ・・・・・

教卓は「ゴミ」屑と化した。

・・・なぜ？

福原「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください。

」

福原教諭はそう告げると、教室から出て行った。

雄兄と吉井君も出て行った

しばらくすると二人が帰ってきた

福原「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

坂本「了解」

先生に呼ばれて雄兄が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄る姿は先程までのふざけた雰囲気は見られない。

福原「坂本君はFクラスの代表でしたよね?」

福原教諭に言われ、頷く雄兄。

最もクラス代表といつても最低クラスの成績者の中での一番に過ぎない。

坂本「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。さて、皆にひとつ聞きたい」

雄兄は、ゆっくりと、全員の顔を見るように告げる。

坂本「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがー」

雄兄「一不満はないか?」

『大あいじやあつーー』

「雄兄は変わらないなあ・・・」

僕のつぶやきは誰にも聞こえない

第一話（後書き）

良ければ感想・アドバイス等ください

第一話（前書き）

「ハハハ

第一話

Fクラス代表坂本雄一はAクラスへの宣戦布告の引き金を引いた。

F「勝てるわけがない」

F「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

F「姫路さんがいたら何もいらない」

当然とも言える反応が教室のいたるところから上がる。

ここ文月学園のテストは制限時間内の問題数無制限。

その為、学力次第では、どこまでも点数を取ることができ、成績が優秀な者と低いものとの差がはっきりと出る。

Aクラスの生徒の一人当たりの点数はFクラスの生徒一人の3倍くらいある。その戦力の差は歴然なんだ。

坂本「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる。」

にも拘らず、雄兄はそう宣言した。そんな雄兄の発言に対しクラス内で否定的な意見が響き渡る。

坂本「根拠ならあるが、このクラスには試合戦争で勝つ事のできる要素が揃っている。」

姫路さん以外の戦力は……！ そつか！

坂本「それを今から証明してやる」

そう言い、不敵な笑みを浮かべる。

坂本「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを除いてないで前に来い」

土屋「…………（ブンブン）」

姫路「は、はわつ」

必死になつて顔と手を左右に振る否定のポーズを取る土屋くん。

あそこまで恥も外聞もなく低い姿勢から覗くとは、いい根性だね。

・

坂本「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者だ」^{ハッピーニー}

土屋「…………（ぶんぶん）」

ムツツリーーーといつ名は男子には恐怖と畏敬を、

女子には軽蔑を以て挙げられる。（僕も軽蔑してる）

必死に畳の跡を手で自分で押さえる土屋くん。

既にバレバレだが、異名は伊達じゃないよつだ。

坂本「姫路のことは説明する必要もないだろ。既だつてその力はよく知つているはずだ」

姫路「えつ？ わ、私ですか？」

坂本「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

雄兄の言つとおり、試合戦争をやるなら、姫路はFクラス最大で最強の戦力になるはずだ。

坂本「木下秀吉だつている」

木下秀吉。学力では名前を聞かないが、演劇部のホープで名が通つてゐる、他にも双子のお姉ちゃんの事など。

F「おお……！」

F「ああ。アイツ確か、木下優子の」

坂本「当然俺も全力を尽くす」

F 「確かになんだかやつてくれそな奴だ」

F 「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかつたか?」

F 「それじや、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だつたのか」

F 「実力はAクラスレベルが一人もいるつてことだよな?」

気がつけば、クラスの士氣はどんどん上がつていた。

坂本「それに、吉井明久と萩原信也だつている」

——シン——

そして一気に下がる。

吉井「ちよつと雄二ーーびひしてセーで僕の名前を呼ぶのセー全くそんな必要はないよねーー」

吉井くんが騒ぎ出す。

F 「誰だよ吉井明久つて」

F 「聞いた事ないぞ」

吉井「ホラー!せつかく上がりかけてた士氣に翳りが見えてるし!...僕達は雄二たちと違つて普通なんだから、なんで僕を睨むの?士氣が下がつたのは僕のせいじゃないでしょ!...」

坂本「そ、うか。知らな、いよ、うなら教えてやる。」こ、つ、らの肩書き
は観察処分者だ」

F「……それって、馬鹿の代名詞じやなかつたつけ？」

吉井「ち、違つよ、ちよ、とお茶田な十六歳につけられる愛称
で」

坂本「信也は違つが、吉井はバカの代名詞だ」

吉井「肯定するな、バカ雄一一それと僕がバカの代名詞みたいじ
やないか」

姫路「あの、それって、どう、こ、う、ものなんですか？」

姫路さんは知らな、いらしく雄兄に尋ねる。

坂本「具体的には教師の雑用係だな。力仕事などの類の雑用を、
特例として物に触れられるようになつた召喚獣でこなすといつた具
合だ」

雄兄がそう解説する。召喚獣は本来は召喚獣以外の物に触れる事
ができない。最も学園の床には特殊な処理が施されて、立つことは
できるのらしい。

しかし、吉井くんと僕の召喚獣は、雄兄の言つとおり、物に触れ
られる特別仕様のようだ。

最も物理干渉能力のある召喚獣は召喚獣の負担の何割かは召喚獣

の召喚者にファイードバックされるんだけど。

F 「おーおー。 観察処分者 つてことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ？」

F 「だよな、 それならおいそれと召喚できぬヤツが一人いるってことだよな」

坂本「気にするな。 信也は違うが、どうせ、 いてもいなくとも同じような雑魚だ」

吉井「雄一、 そこは、 僕をフォローする台詞を言ひべきだよね？ しかもなぜ萩原君はいいの？」

坂本「言ひてなかつたか？ 信也は入学以来ずっと学年主席だったんだぞ」

坂本「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはロクラスを征服しよつと思つ」

吉井くんの抗議は大胆に無視された。

坂本「皆、この境遇は大いに不満だろ？」

F 『当然だ！』

雄兄の言葉にクラス中が大いに盛り上がる。

姫路さんもその雰囲気に圧されたのか、小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはロクラスへの宣戦布告の使者になつてもいい。無事大役を果たせ」

吉井「下のクラスの宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

坂本「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみる」

吉井「本当に？」

坂本「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

坂本「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似をしない。もしあれだつたら信也を連れて行け」

「僕も？」

坂本「ああ」

吉井「わかったよ。それなら使者は僕達がやるよ」

坂本「ああ、頼んだぞ」

クラスメイトの拍手と歓声に送り出され吉井くんと僕は毅然とした態度で教室を出て行つた。

ロクラスへと続く廊下を歩いていると、吉井君に話しかけられた

吉井「萩村君は雄一と仲いいの?」

「うん! いいよ。あと僕のことは信也でいいよ」

吉井「やうなんだ。僕も明久でいいよ」

と、いろいろ話しているとロクラスについていた

吉井「いよいよだね」

「うん、じゃあ、あけるね」

ガラツ

「失礼します、Fクラスの萩原信也です。ロクラスに宣戦布告しにきました」

吉井「同じくFクラスの吉井明久です」

ロ「コロセヒー」

「うるさいなあ

「すいません少しよろしいですか?」

殺氣を出しながら言ひ。もちろん顔は笑顔だ

「上位のクラスがそんな」としていたらびつするんですか?」

みんながびびってる。たいしたこと無いのにね

「吉井君は先に帰つてて」

吉井「う、うん」

雄一サイド

さあ、もう後には引けないな。宣戦布告せどりうとも無傷だらうな

ガラツ

吉井「たつだいまー」

?明久だけか・・・まさか

「明久、信也は?」

吉井「信也なら、先に帰つていったから帰つてきた」

「相手のクラスはどんな態度をとっていたんだ？」

吉井「それだよー騙したな雄二ー」

「早く言え」

吉井「いきなり殴りかかるなり殴りかかるなんて

萩原「ただいまです」

萩原サイド

まったくひどいよいきなり殴りかかるなんて

「ただいまです」

坂本「おお、お帰り」

「お帰りじゃないよー。危なかつたんだからね

坂本「悪い悪い。今からミーティングを行つぞ」

雄兄は扉を開けて外に出て行つた。それに続く、明兄、島田さん、姫路さん、木下くん、土屋くんの五人。

僕はそれに構うことなく、自分の席について、家から持つてきたパソコンをひろげる。

戦争に情報収集は欠かせないからね

こうして僕の新学期の一日目が終わつた

第一話（後書き）

ありがとうございます
良ければ感想・アドバイス等ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5227ba/>

僕とFクラスと召喚獣

2012年1月14日17時00分発行